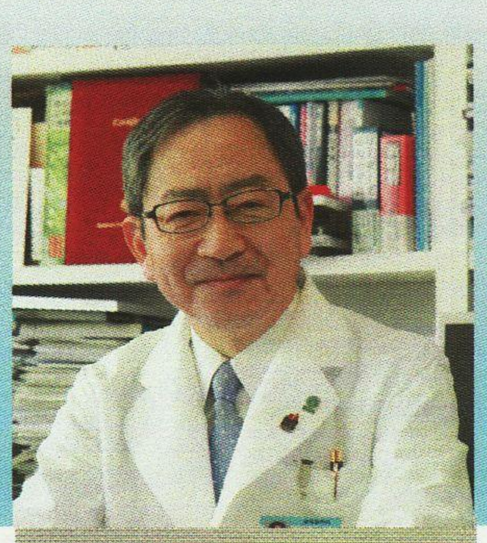
NPO法人 臨床応用科学
Clinical and Applied Science

Vascular Street

特集

医学生の海外研修報告



福岡大学医学部長
朔 啓二郎 先生

福岡大学医学部5年生
藤土 光 君

福岡大学医学部5年生
宮崎 稚子 さん

はじめに

福岡大学には、国際社会で大いに活躍できる人材の育成を目指し、学生が海外で学ぶプログラム(Global active program: GAP)があります。福岡大学ビジョン2014-2023の中でも、「国際化の推進」は重点項目の一つです。福岡大学全体での留学生数は、海外派遣が523人、受け入れが596人、新規海外協定校が59大学です。日本全国どの大学も国際交流を積極的に取り入れてます。福岡大学も交換留学や認定留学、海外研修などの制度が整備されてきました。短期留学を全学生に義務化する大学もあるようです。医学部には大学の国際交流とは別に、国際医学生連盟 (IFMSA) の中で、毎年数名の学生さんが様々な国に行って医療支援や研究を行っています。IFMSA は第2次世界大戦後の1951年にヨーロッパで設立され、本部をフランスの世界医師会内に置いています。医学生を代表する国際フォーラムとして認められた非営利・非政治の国際 NGO です。99の国と地域から多くの医学生が参加し、UNESCO や UNICEF などの国連機関とも公式な関係を結んでいます。IFMSA には、臨床交換留学、基礎研究交換留学、公衆衛生、性と生殖・AIDS、人権と平和、医学教育の6つの常設委員会があり、世界各国で様々なプロ ジェクトを運営しています。日本は1961年に IFMSA に加盟し現在に至ります。IFMSA-Japan は、年間150名以上を交換留学に送り出し、子供を対象とした健康増進プロジェクト、生活習慣病予防啓発活動、貧困問題や死生観・医療倫理・地域医療について学ぶ勉強会や、東南アジア、アフリカでの保健衛生活動、平和について考えることをテーマとした国際サマーキャンプ、アジア地域での災害医療分野での人材育成プロジェクトなど、様々な国際活動も行っています。今回は福岡大学医学部5年生藤土光君、宮崎稚子さんのレポートを特集しました。

NPO法人 臨床応用科学
Clinical and Applied Science

「RSUD Dr. MOEWARDI 病院での熱帯医学研修」

福岡大学医学部5年生　藤土 光 君

今年の2月27日から3月29日まで、以前から興味を抱いていた熱帯医学を学ぶため国際医学生連盟（IFMSA）研修留学生として、インドネシアジャワ島東部ソロにあるRSUD Dr. MOEWARDI 病院に行かせていただきました。ソロはジャワ島最大のソロ川のほとりにある町で18世紀頃ジャワ島の中心地として王朝文化が栄えた古都として有名です（図1）。

図 1

デング熱、レプトスピラ症、コレラなど日本では見慣れない多くの症例を体験しました。また実際に現地でのベッドサイド（BSL）を通して熱帯感染症の裏に潜むアジア特有の熱帯気候の問題、衛生面での問題、教育面での問題、貧困や文化宗教的な問題といった様々な患者背景を知ることができてとても勉強になりました。医師になるという同じ方向性を目指す多くのインドネシアの医学生に知り合うことができました。3週間という短い期間ながら、共に学ぶことができたことは一生の思い出です。また、熱心に指導してくださった先生方に対し感謝します。今回の留学は忘れられないものとなりました。図2はRSUD Dr. MOEWARDI 病院の感染症病棟です。約3週間の間、現地の医学生とともに病棟実習を行い、実習最終日に自ら選んだ症例を各自発表するのですが、私はジカ熱とともに今日本でも注目されているデング熱を症例としてまとめ発表しました。週末は現地の医学生とともにインドネシア観光に行き、大学があるソロ市の市場を観光したり、世界三大仏教遺跡ボルブドゥール遺跡、そして写真（図3）のインドネシア最大のヒンズー教寺院プナンバナン遺跡を観ることができ文化や宗教にも触れることができました。現地での食事は3週間いても日本食が恋しく感じないほど美味しい食べ物や果物ばかりでした。図4はインドネシア料理で有名なナシゴレンで上にのっているのは鶏の頭部のから揚げです。

図 2

図 3

図 4

<デングウイルスについて>

デングウイルスの媒介蚊は、ネッタイシマカとヒトスジシマカ。ネッタイシマカは日本国内には生息していないが、ヒトスジシマカは北海道と青森県を除く日本各地で夏季には活発に活動している。実験的にデングウイルス感染蚊を産卵させて、孵化させると 0.2 ～ 0.5%の幼虫からウイルスが検出されたという報告はあるが、自然界でデングウイルスが卵越冬する可能性はきわめて低い。

（MEDICAMENT NEWS 第 2232 号より引用）

Editor: Keijiro Saku, MD, PhD, FACP, FACC

NPO法人 臨床応用科学
Clinical and Applied Science

「Cheikh Zayed 病院の NICU での医学研修」

福岡大学医学部5年生　宮崎 稚子 さん

私は今年の3月に1ヶ月間モロッコのラバトという街へ臨床研究留学をしてきました(図5)。

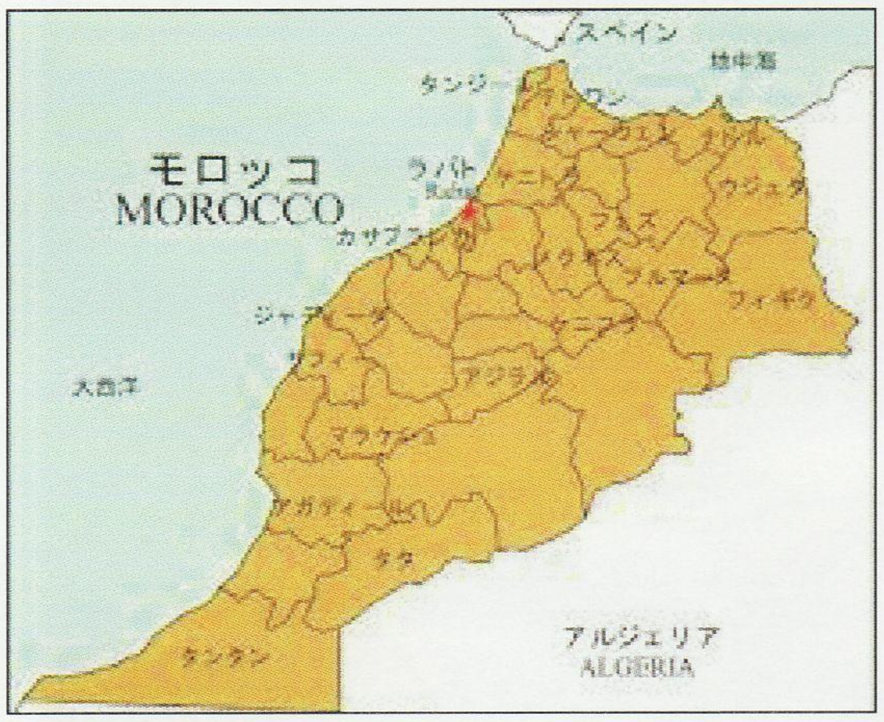


図 5

福岡大学 ESS 愛好会は IMFSA-Japan(国際医学生連盟)に団体加盟をしており、この団体が行っている交換留学の制度を利用しました。そのため ESS に入っていると大学で留学生を受け入れてお世話をするかわりに、留学をすることができます。今回はこの制度を使い、またアフリカ大陸に行ってみたかったためモロッコへ行ってきました。モロッコへ行く前は、どんなところかも全くわかりませんでしたが観光立国であるため英語もある程度通じるしそんなに困ることもないだろうと楽観的に考えていました。ただイスラム教の国なので ISIS 関連でなにか事件に巻き込まれることがあるかもしれない心配はありました。

今回私は Cheikh Zayed 病院(図6)の NICU で実習をしてきました。月曜日から金曜日の朝から夕方まで実習があり、夜は他の留学生や現地の人たちと遊んだりしていました。NICU では医師が一人と看護師や薬剤師などのチーム医療が行われており、そこで私は患者さんの状態を診たりしていました。この病院がラバトの中でもトップクラスの病院ですが、感染症に対する考え方や治療方法など特に日本との違いを感じることはありませんでした。しかし、その後同じ時期にイタリアから留学してきていた医学生に一般病院を紹介してもらい見学に行ったところ、病院があまりきれいでなく、患者さんがすごく多くその家族などお見舞いの方達が地べたに座っていたり、また電子カルテがなくアナログな器械が多く、まだまだ日本のような医療に追いついていない印象を受けました。モロッコではプライベート病院は質が良い医療をうけられますが、医療費が高く、一方、公的病院は値段が安い代わりに質の良い医療を受けられず、また患者さんも多いため待ち時間が長いという事情があるようです。それのみでなく、モロッコでは医師の給与が良くないので能力のある医師はドイツなどヨーロッパ諸国に流れてしまうようです。モロッコではミントティー(図7)をよく飲むのですが、それに大量の砂糖を入れるなど砂糖を多く摂取する食文化であるため糖尿病患者がとても多いなど、様々な問題を抱えています。

この留学では社会プログラムという制度が組み込まれていて、現地の人と交流する機会があります。私はホストファミリーが日本好きということで、寿司パーティー

図 6

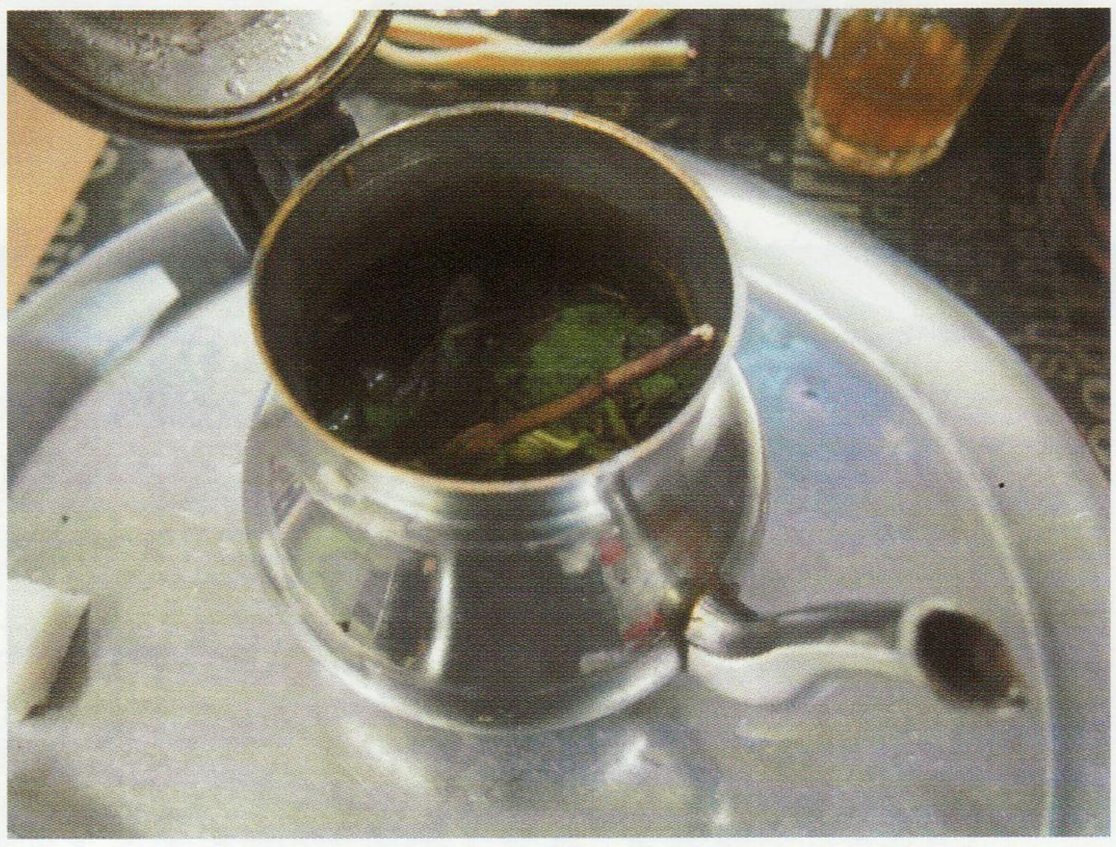


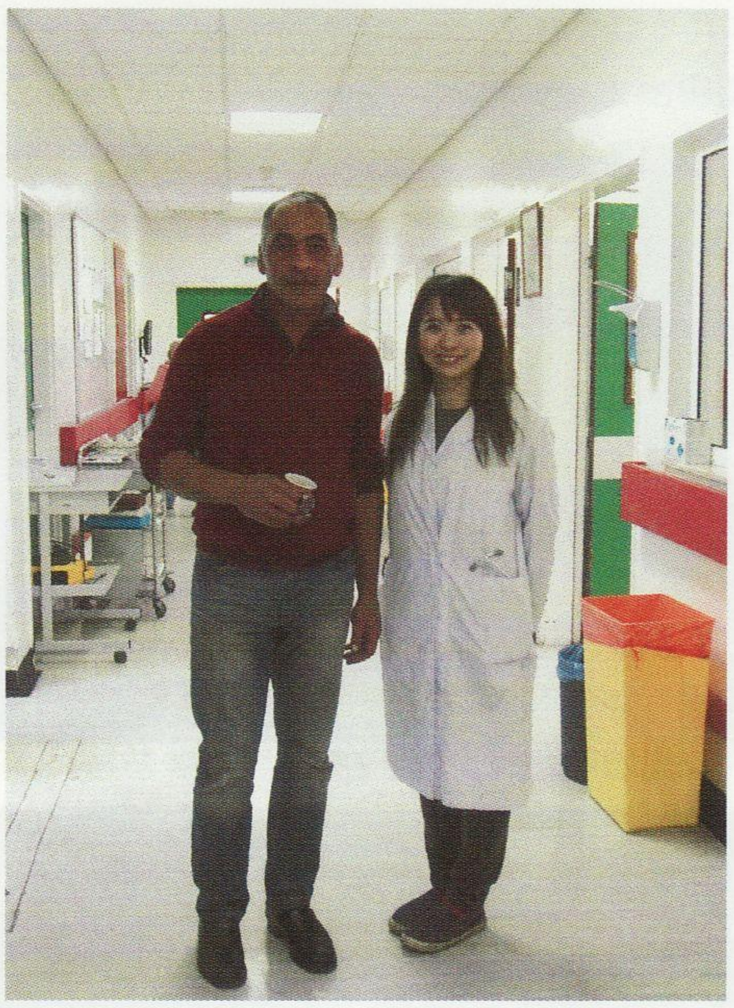
図 7

NPO法人 臨床応用科学
Clinical and Applied Science

をしていただいたり、他の現地の人の家に招待していただきご飯をおご馳走になったり、サングリアパーティーをしていただいたりと、たくさんの人がお世話をしてくれて歓待してくれました。現地の人だけでなく、同時期にドイツから2人とイタリアから1人の医学生も来ていたので、その4人で毎週末小旅行をしたりサーフィンに行ったりして、毎日充実した日々を過ごしました。

今回の留学では実習では実践的なことはあまりなかったものの実際に行われている医療を見学することができ、現地の医師と直接話ができ、それ以外でも現地の学生やホストファミリーとの交流、文化の違いや考え方の違い、現地の人が思っていることを聞くことができてモロッコの悪いところも良いところも勉強になり、いい経験になったと思います。

今回の留学でいつもお世話になっている福岡大学の先生方やESSの人たちに感謝をしつつ、この活動をいつまでも続けていくつもりです。



Prof. Saku's Commentary

医学生は積極的である。IMFSAで海外留学する場合、一人で現地にいく。二人で連んでいくのではなく、一人づつ派遣先が異なる。若いお嬢さんがイスラム社会のモロッコに一人で行くなど、聞いただけで猛反対していたが、そんな雰囲気ではないようだ。医学生連盟の現地の医学生が飛行場に迎えにきてくれ、すばらしいおもてなしを受けるとのこと。今回はインドネシアとモロッコを紹介したが、彼らは南米ペルー、ウルグアイやパラグアイなど世界中に行って視野を広げている。異文化の医療を知る、異教徒の死生観を知るのも将来の人間形成には重要と感じる。何より、許容する範囲が広くなるからである。

Editor: Keijiro Saku, MD, PhD, FACP, FACC